

豊田寛三監修 『江戸時代 人づくり風土記 大分』

この度、県別シリーズの一冊として『江戸時代 人づくり風土記』ふるさとの人と知恵「大分」が農山漁村文化協会（農文協）から発行された。B5版、三四八頁の大分県版の監修は豊田寛三さんによる。

最初に本書の構成を示すと、次のとおりである。

前 章 近世の大分

第一章 自治と助け合いの中で 編集者 佐藤 満洋

第二章 生業の振興と継承の中で 編集者 秦 政博

第三章 地域社会の教育システムの中で 編集者 豊田 寛三

第四章 町、村、家の暮らしと文化 編集者 小泊 立矢

第五章 地域おこしに尽くした先駆者 編集者 鳥井裕美子

資料編 大分の江戸時代年表、その他

これらの執筆者は二五名、いずれも本会の会員である。前章「近世の大分」その地域振興の足どり」は佐藤満洋さんの執筆で、以下の各章の導入のため、近世大分の姿を副題にあるように地域振興の視点から概観したもの。これに続く第一

章は小藩分立、城下町と地方支配、新田開発と井路開削など

一〇節からなり、近世大分の支配体制とその基盤を明らかにし、第二章では日田の掛屋と日田金、城下町で栄えた商業、

豊後表・みかん・かぼすなどの特産品、その他の諸産業を九節に分けて紹介する。このあと第三章では県下各地の藩校・

私塾・寺子屋など、近世大分の教育とその特色を七つの節で紹介。いつ頃どこで、どのような人によって豊の人材育成が

なされたか、その概要が実によく纏められている。これら政治・産業・教育などを支えた信仰・文化を、隠れキリシタン、

路傍の神仏、祭りと市など八つの節で追求するのが第四章であるが、このような土壌の中に生まれた代表的先駆者の中か

ら八人、三浦梅園・大蔵永常・賀来飛霞・帆足万里・田能村竹田・広瀬久兵衛・村瀬庄兵衛・福沢諭吉を紹介したのが第

五章であり、「江戸時代人づくり風土記」の終章にふさわしい構成と内容になっている。

巻末には、近世大分の理解を更に深めるための資料編を配

置する。佐藤満洋さんの西国筋郡代と掛屋の特論に続き、江戸時代年表・主要文献・大分物産一覧などを掲げる。

本書は前章のみ二段組、各章は一段組にして脚注を多く付け、更にいずれも本文中に補注を入れ、その上、難しい用語のみでなく若年層や県外の読者を想定して数多くのルビを付す。その上、章を構成する節は、長いもの八頁、短い作品は五頁、平均七頁弱で纏められている。本書は小学校の高学年も読めるようにしたと聞くと、広い読者層を想定しての執筆・編纂で、関係者の意欲が感じられる著作といえよう。

一般的なことであるが、執筆の内容や体裁に諸条件を付けると体裁は整うものの、文章は味気なくなるものである。その点、本書の作品、いずれも分かりやすく、しかも多くのものは格調の高い記述になっていて、狙いどおりに小学校高学年から大人まで一気に読み、繰り返し読みたくなる著作といえよう。

一例を挙げよう。終章の第一節は三浦梅園、これを狭間久さんが執筆されている。大多数の人は、三浦梅園は「くにさきに生まれた学者」あるいは「玄語の作者」であることくらいは承知していても、その人柄、学問の内容に至っては、凡

夫の遠く及ばぬ世界と傍観しているのが一般であらう。ここでは先入観を捨て去り、この節の一読もお勧めしたい。梅園を簡潔で、分かりやすく、しかも格調高く記述したものは他にないと思うが、更に現今の「人のありよう」なども考えさせる作品である。中見出しで概要を垣間見ると、次の五項目からなる。ニュートンと同じ疑問をもった梅園、生涯の友との出会い、だれも達していない条理を発見、いち早く人間と万物の共生に気づく、地域に貢献し豊後聖人と慕われる。これらの内容の詳細は省略するが、既に三浦梅園・帆足万里・福沢諭吉・広瀬淡窓その他の先駆者についての著作のある狭間さんならではの、改めて思ったことである。

このように個々の作品いずれも優れ、どの章節から読み始めても面白い。しかし、前述のように二五人による著作とは思われぬ一貫した作品構成で、通読した人は、近世大分の歴史とそこに躍動する人に、改めて強い感動を覚えることであろう。座右の一書として、是非お求め下さるよう推奨するものである。

なお早い再版を待望しているが、その折には、事実誤認の単語二ヶ所などの補訂を願いたいものである。(後藤正二)